

---

# 伊号第四九潜水艦～原爆輸送を阻止せよ～

沖田五十六

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

伊号第四九潜水艦〜原爆輸送を阻止せよ〜

### 【Nコード】

N2522N

### 【作者名】

沖田五十六

### 【あらすじ】

太平洋戦争末期、大日本帝国は潜水艦による攻撃しか出来なくなっていた。そんな時、諜報員が重大な情報を得た。「原子爆弾が沖縄に輸送される」巡潜丙型潜水艦、伊号第四九潜水艦は、それを阻止する為に出撃して行った。

## 上

1945年8月10日、広島県呉市の軍港から一隻の潜水艦が出航した。艦橋には、「イ49」と描かれていた。甲板には、親の鯨の背中に乗った子鯨のように特攻兵器「回天」が二隻、載せられていた。その「回天」を艦橋で見ているひげを生やした海軍軍人が一人いた。

「・・・外道の兵器が・・・」

その男は、「回天」を見ながら言った。

「山本艦長、潜行準備整いました。早く艦内へ。」

山本艦長      山本三郎やまもとさぶろうは頷いた。報告した男は艦内へ降りるハッチに入ろうとしていた。

「・・・安部副長。後で「回天」搭乗員を艦橋に呼んでくれ。話しておきたいことがある。」

「了解しました。・・・艦長、我々は負けるのでしょうか・・・」

副長から質問された問題は、既に答えが出ている。

「・・・日本が負けるだろうな。原子爆弾のような物を落とされているんだ。持ってあと一週間ぐらいだろう。」

「・・・そうですか。」

副長はそう言つて艦内に降りて行つた。

「……………そう、日本は負けるのだ。」

山本はそう呟いた後、艦内に降りた。

小笠原諸島 硫黄島沖

この海域を、輸送船十隻と駆逐艦四隻の艦隊が通過していた。向かう先は、沖縄。

「艦長、艦隊司令から入電。クレから潜水艦が一隻が出航した模様、警戒されたし。との事です。」

輸送船団の護衛の駆逐艦「スタンフォード」の艦橋で、通信士が報告した。

「分かった。ソナー班に警戒させておけ。なんたつて、今輸送しているのは、ニホンへの最期のプレゼントだ。」

「了解しました。」

通信士が艦橋から出た後、副長が質問した。

「トス力艦長、たかが一隻の潜水艦ですよ。そんなに警戒しなくても……………」

「副長、今輸送しているものは何だ？」

「それは……………」リトルボーイ「です。」

「もし、その潜水艦が沈めたらどうする。我々は左遷されて、二ホ  
ンに勝ったとしても喜べる状況じゃなくなる。」

「・・・了解しました。」

副長は、下がった。何処と無く、恐怖の色が顔に出ていた。

「・・・出来れば、沈めて欲しいものだな。」

艦長 トスカ・J・ヒリップスは呟いた。そして、「リトル  
ボーイ」原子爆弾が艦載してあるはずの輸送艦を見た。

伊四九は、潜水したまま豊後水道を進んでいた。かつて、日本海軍  
の象徴であった戦艦「大和」が出撃して行った豊後水道にも、B・  
29によつて機雷が投下されているからである。伊四九の艦橋に二  
人の少年兵が呼ばれていた。

「「回天」搭乗員、鈴木定一すずきさだいちであります！」

「同じく、松永紀久雄まつながきくおです！」

山本の前に立っている少年兵は、どちらも16歳ほどの年齢である。

「・・・鈴木君、松永君、君達は「回天」に乗るつもりだな？」

「当然であります！」

「この時の為に訓練してきたんです！必ず敵をしとめます！」

二人がそついい終えた後、山本の手が頬に入っていた。

「馬鹿者！お前達にも家で待っている者が居るであろっ！なのに命を粗末に扱う者が居るか！」

殴られた二人は、目が点になっていた。昨日まで死ぬと言われてきたのであるのに、出撃したら死ぬと言われたのである。

「本日で、「回天」搭乗者から解任、この艦の予備役に入ってもらう。以上だ。」

「・・・了解しました・・・」

二人が艦橋を出て行った後、副長が声をかけて来た。

「艦長、「回天」は破棄しますか？」

「いや、このまま残しておけ。後で役立つかも知れん。」

「了解しました。艦長、作戦会議の時間です。」

山本は、伝声管に静かに言った。

「各持ち場の班長は艦橋に上がれ。作戦会議を行う。」

数分後、艦橋には数十名の者が集まった。

「これより、作戦会議を行う。まず、敵の戦力及び航路についてだ。」

航海長。」

「は。まず、偵察機の報告によると、敵の戦力は駆逐艦四隻、輸送艦十隻による輸送艦隊です。沖縄に向かって直進、10ノットで航行しています。」

「それに対してこちらは潜水艦一隻か・・・」

他の将校がそう呟いた後、ほぼ全員がため息をついた。

「水雷長、魚雷本数は？」

「魚雷は二十本、「回天」を使えば二十二本です。」

「一隻に一本ずつとして、残りは八本か。水雷科の奴らが腕が良ければ余裕だな。」

「大丈夫ですよ。この艦に乗っているのは、海中の針を鉄砲で当てられるほどの奴らですよ。」

それは言い過ぎだと思う、と数名が思ったらしく、苦笑いを浮かべていた。

「我が艦は、沖縄から二千km離れた海域で待機、輸送船団を待ち伏せる。以上だ。解散。」

山本が、そう締めくくって作戦会議は終了した。

輸送船団の「スタンフォード」の艦橋では、トスカがコーヒを飲

んでいた。艦内からは、笑い声も聞こえる。

「艦長、あの原爆は使って良いものなのでしょうか……。ジャップが戦争を続けているとは言え、一都市を軍民問わず一発で消滅させる。そんな物を使って……」

「良いはず無い。軍人はともかく、国民を巻き込む。この戦争で、アメリカは危険すぎる物を手に入れてしまった。この先、何発の原子爆弾が投下されるのか、そして、何人が犠牲になるのか……」

その時のコーヒーは、彼の人生で一番苦かった。その時、通信士が報告に来た。

「艦長、艦隊司令より入電。敵潜水艦はオキナワの沖、二千kmにて待機中である。以上です。」

「……他の駆逐艦に通信しろ。三隻は、先行してオキナワへ向かい、潜水艦を沈める。護衛は「スタンフォード」がする。と。」

「了解です。」

通信士が去った後、副長がトスカに話しかけた。

「三隻を出せばこちらの護衛は手薄になるのでは？」

「ニホンには、潜水艦一隻出すのもバレているんだ。他に展開している潜水艦は0。奴さえ倒せば後は安全だ。」

「そつでしょうか。」



沖縄の二千kmの海域に到着した伊四九を出迎えたのは、駆逐艦三隻だった。三隻は、二隻が爆雷攻撃、一隻がソナーを打って場所を教えていた。艦内には、カーンと言う音が鳴り響き、その後、周りに爆雷の赤い花が咲き乱れて、伊四九をもて遊んでいた。

「畜生！まだ一撃も加えてないのによ！」

副長が、表情を歪めて叫んだ。すると、あざ笑うように爆発がした。

「メインタンクブロー！深さ二十まで急速浮上！」

伊四九の巨体が、速度を上げて上昇していった。いくつもの爆雷がそばを通っていった。そして、つい先ほど伊四九が居た所で爆発した。

「よし！次はこちらの番だ！1番と2番は魚雷発射用意！敵さんに思い知らせてやれ！」

伊四九は、20mまで浮上。潜望鏡を上げて、正面に駆逐艦を捕らえた。急速転舵中で、その駆逐艦の前前にはさらに駆逐艦がいた。

「1、2番、魚雷発射！」

山本の号令によって放たれた九五式酸素魚雷は、あまり目立たない雷跡を残しつつ、駆逐艦の横腹を貫き航行不能にした。続いて、その駆逐艦の正面に居た駆逐艦に衝突、二隻を戦闘不能にした。

「測的員！もう一隻はどうした！」

「衝突した二隻の方に向かっています。救助に向かう模様。」

「・・・艦長、どうしますか？」

「・・・最大戦速で海域を離脱、敵の輸送船団を攻撃する。」

「了解しました。取り舵一杯、最大戦速。」

伊四九潜水艦は、その場から離脱して、輸送船団の攻撃に向かった。

## 上（後書き）

終戦2日遅れですが、終戦手前の物語です。「真夏のオリオン」及び、「終戦のローレライ（小説）」を参考にしています。

ご感想のほう、お願いします。

## 下

駆逐艦「スタンフォード」の艦橋で、トスカは絶句していた。潜水艦一隻に対して駆逐艦二隻が戦闘不能になり、さらにはこちらに向かつてきているのである。

「護衛を先行させたのが間違いだった・・・全艦戦闘配置！輸送艦は、原爆艦載艦を中心において輪形陣に移れ！ソナーは警戒態勢！早くしろ！」

艦橋に復唱や報告の声がし、船体は移動する兵によって震動した。

「全員、配置に付きました！」

「・・・後は、敵を待つだけか・・・」

トスカは、沖縄の方向を見た。水平線の上には何も無い。ただ、空には満天の星空が覆っていた。

そのころ、伊四九では夕食が配られていた。この日は、火曜であるにもかかわらず、カレーであった。

「頂きます！」

山本は、目を輝かせて言った。山本は大のカレー好きであった。

「艦長、こんな時でも楽しそうだな・・・ある意味才能なんじゃないのか？」

副長が苦笑いをこぼした。他の人もつられて笑った。その時、聴音長が叫んだ。

「艦長！1時の方向にスクリュウ音多数！敵輸送船団です！速度15ノット！距離3万！本艦の方向に向かってきています！」

「よし、戦闘配置に付け！現在の深度は！？」

「深度30！速力4ノット！」

「メインタンク、ちょいブロー！潜望鏡深度まで浮上！面舵30度！」

「潜望鏡深度です！」

山本は、潜望鏡を覗いた。一隻の駆逐艦を先頭に、九隻の輸送艦が一隻の輸送艦を囲っている。

「艦首魚雷発射管、射撃用意！」

その時、カーンというソナー音が2、3回した。

「魚雷、発射！」

下から鈍い音がして、続いてスクリュウ音がした。駆逐艦が取り舵を取って右側に動いていく。

「全魚雷、正常起動！」

「トス力艦長！スクリュー音8！魚雷です！」

「回避！全速前進だ！回避後、取り舵一杯！」

「スタンフォード」が、魚雷の軌道を避けた。が、後続の輸送船が取り残された。九五式酸素魚雷はそのまま直進し、三隻の輸送船に数本の水柱を生じさせた。

「魚雷命中！三隻が撃沈します！」

「次弾装填急げ！駆逐艦が来るぞ！潜舵、最大俯角！深さ60へ潜航しろ！」

潜望鏡から目を離して命令した。潜水艦が、艦首方向に傾き始めたとき、カーン・・・カーンと言う音が伊四九を叩いた。

「駆逐艦、真上に到達！続いて海面に着水音、爆雷です！数、18発！」

「総員、対衝撃用意！爆雷が来るぞ！」

伊四九の誰もが上を向いた。そして数分後、伊四九の周りを火球が覆った。

先ほど、爆雷を投下した位置に水柱が立った。が、いくら経っても重油や浮遊物が上がってこない。

「仕留め損ねたな・・・輸送船団に連絡しろ。先にオキナワに向かえ。潜水艦は足止めする、とな。」

トス力は、敵が息を潜めているであろう海中を見つめた。何処までも黒く、深い海が見つめかいした。

「被害報告、急げ！」

（後方兵員室浸水！艦首魚雷室で3名死亡！）

（「回天」が一隻外れました！搭乗口から浸水！他にも多数浸水しています！どんどん深度が下がっていきます！）

「メインタンクブロー！浮き上がれ！」

タンク内の海水が放出されていく。が、船体は浮き上がることなく、その場で停止した。

「浸水はまだ止まらないか！」

（後、1分ください！必ず止めます！）

「聴音、駆逐艦は？」

「艦の上方で停止した模様。輸送船団は低速ですが、沖縄に向かっていきます。」

山本は歯を食いしばった。

「・・・副長、艦内マイクを付けてくれ。」

「了解しました。」

副長が、艦内マイクのスイッチを付けた。

「乗員全員に伝える。今、我々の置かれた状況は、敵に頭を抑えられて目標を逃そうとしている。だが、この艦を沈めるわけにはいかない。俺が道を開く。副長に指揮を変える。諸君は生き残る事を考えろ。」

山本は、艦内マイクを切った。

「副長、指揮を変われ。」

「・・・艦長、回天を使う気ですか。」

「そうだ。若い者を殺してたまるか。」

山本は、艦内部に下りるハッチに手をかけた。

「・・・艦長。」

副長に呼ばれ振り向くと、その場にいた全員がこちらに敬礼していた。

「・・・指揮、変わります。どうか、お氣をつけて。」

山本は、微笑して艦内に降りていった。



「潜水艦の動きはどうだ。」

「先ほどと同じ位置で停止しています。」

持久戦か・・・そうトスカが思った時、ソナー員が叫んだ。

「敵艦より、高速スクリー音！これは・・・」

「「カイテン」か・・・全速前進！爆雷投下！駄目です！間に合いません！」

「アメ公！今まで死んでいった英霊の無念、晴らしてくれる！」

本当なら、水上に出して潜望鏡を覗いた。ちょうど、月光が敵の影をはっきりとさせていた。

「うおおおお！」

山本は、昔の事を思い出した。15歳の頃、初恋をした相手。海軍学校で同期になった戦友。戦争が始まり、喜ぶ戦友の中で一人喜ばなかった自分。そして、先ほどまで一緒だった伊四九の乗員。全てが懐かしい、と思った。が、その思考も直後に消え去った。

「スタンフォード」は、竜骨に「回天」の直撃を受け、艦の中心に向かって沈み始めた。トスカは、艦橋から脱出しようとしたが、窓から入った海水によって押し戻され、艦と運命を共にした。

伊四九は、原子爆弾を乗せた輸送艦を含めた7隻を撃沈。次の日に終戦を伝えられて呉に帰航した。戦後、伊四九はハワイの沖で沈没された。原爆を沈めた真実も一緒に葬られ、存在も消された。

\*この物語は、この潜水艦に乗っていた「回天」搭乗員であったという、鈴木定一によって証言された物である。N Kの特別番組「伊号第四九潜水艦」原爆輸送を阻止せよ！」より

## 下（後書き）

伊四九という潜水艦は居ませんのでご了承ください。

ご感想、ご意見等をお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2522n/>

---

伊号第四九潜水艦～原爆輸送を阻止せよ～

2010年10月10日15時44分発行